

科学者委員会学術体制分科会 第3回

<2024.4.25>

日本学術会議若手アカデミー

見解「2040年の科学・学術と社会を見据えていま
取り組むべき10の課題」

日本学術会議連携会員・26期若手アカデミー代表

小野 悠



見解

2040 年の科学・学術と社会を見据えて
いま取り組むべき 10 の課題



令和5年（2023年）9月28日
日本学術会議
若手アカデミー

Advisory Opinion

Remodeling science and society for the next 20 years:
Ten recommendations from Young Academy of Japan



Young Academy of Japan, Science Council of Japan
Sep 28th 2023



多様なステークホルダーとの意見交換

日本学術会議
公開シンポジウム

若手研究者をとりまく評価
調査結果報告と論点整理

世界的な競争、評価をめぐる市場、キャリアパスに関する課題など、若手研究者をめぐる研究・開発活動の環境は多くの課題を抱えています。定量的な業績評価の弊害の他に、特にチャレンジングな研究の促進、あるいは評価指標を過度に重にした活動などの弊害が指摘され、知識生産の可能性を損なうことが懸念されています。

日本学術会議若手アカデミーでは、「若手研究者をとりまく評価に関する課題意識」を背景とし、全国の多くの若手研究者から評価を尋ねました。本シンポジウムでは調査結果の発表を報告するとともに、若手研究者をめぐる評価のあり方について幅広い視点から議論し、知識生産をめぐるよりよいシステムの形成に向けた議論を行います。

プログラム

13:00-13:20
開会挨拶 堀嶋孝 東京大学・教授
趣意説明 小野悠 豊橋技術科学大学・准教授

13:20-13:50 報告
「若手研究者をとりまく評価に関する意識調査」結果報告 横山隆夫 大阪大学・准教授

13:50-15:20 パネルディスカッション
経営学からみる若手研究者評価
座長 藤田 祥子 大阪大学・准教授
研究環境からみる若手研究者評価
江崎新吾 東北大学・教授、大塚 大輔 上智大学経済学系フェロー
ライフプラン・キャリアパスからみる若手研究者評価
加藤千尋 弘前大学・准教授
産官学人材流動からみる若手研究者評価
橋本真樹 東北大学経済学部・教授、佐々木 ジョージ
国際からみる若手研究者評価
新藤洋子 三島大学・教授

オンライン開催
2022年10月6日(木)
13:00~15:30

こちらからご登録ください

主催：日本学術会議若手アカデミー、若手アカデミー一地域活性化に向けた社会連携分科会

若手
研究者

科学

日時：2021年3月1日(月) 13:00-16:30
開催：オンライン開催 (Zoom ウェビナー)

主催：日本学術会議若手アカデミー
地域活性化に向けた社会連携分科会
共催：豊橋技術科学大学
後援：公益財団法人日本学術振興会(国際研究二事業)

若手科学者が拓く地域と科学の関係

13:00 開会挨拶
堀嶋孝 (東京大学・教授)

13:10 趣意説明
小野悠 (豊橋技術科学大学・講師)

13:20-13:50 基調講演「地域と科学を結ぶ大学の役割」
大野雄 (都市工学 | 東京大学・名誉教授)

13:50-14:20 講演「若手科学者がみる地域と科学の関係」
田中和雄 (人工知能 | 産業研究センター・「リサーチ・フェロー」)
松平孝 (工学 | 名古屋大学・教授)

14:30-14:55 講演「学生がみる地域と科学の関係」
池田悠輝 (経営学 | 豊橋技術科学大学・修士課程)
宮本義太郎 (都市工学 | 東京大学・修士課程)
佐藤真紀 (環境工学 | 東京大学・修士課程)

14:55-15:40 講演「豊橋における地域と科学の関係」
藤本祥志 (人工知能 | 豊橋技術科学大学・教授)
佐野昌樹 (機械工学 | 豊橋技術科学大学・准教授)
大村康 (情報工学 | 豊橋技術科学大学・准教授)

15:40-16:20 パネル討論「豊橋から拓く地域と科学の関係」
パネリスト
井野昌樹 (豊橋技術科学大学・企画)
佐藤一彦 (豊橋技術科学大学・学長)
栗山正太郎 (産業機械工学 | 豊橋技術科学大学・教授、大塚 大輔 (教授)
小川直樹 (多岐づくり | 豊橋技術科学大学・准教授)
堀 真由香

こちらより事前にご登録ください
<http://www.nst.ac.jp/kyouka/2021/03/01/>

地域

地域
関係者

第12回 グローバルヤングアカデミー総会・学会

HOME 関係機関 提携 Program Registration 参加者へのご案内 市民公開講座 アート作品 協賛・後援・広告・寄付金情報 リンク

性 & 理性のリバランス：
活性と持続性に向けた科学の再生

世界の若手研究者

14:00 開会の挨拶と趣意説明
加藤 千尋 (日本学術会議若手アカデミー会員・弘前大学准教授)

14:10~15:30 第1部 話題提供
八木澤 玲玖 (株式会社那須産業代表取締役社長)
曾目 真伸 (一般社団法人ナスコンパレー協議会代表理事・SUNDRE株式会社代表取締役)
井上 高志 (一般社団法人ナスコンパレー協議会代表理事・株式会社LIFULL代表取締役社長)
木村 草太 (日本学術会議若手アカデミー会員・東京国立大学教授)
小野 悠 (日本学術会議若手アカデミー幹事・豊橋技術科学大学准教授)

15:50~16:50 第2部 パネルディスカッション
ファシリテーター：
加藤 千尋 (日本学術会議若手アカデミー会員・弘前大学准教授)

本シンポジウムでは、那須地域が抱える社会課題の解決のために展開されている「ナスコンパレー」の取組を紹介し、地方創生について専門家を招いて議論します。ぜひご参加ください。

参加費無料・予約不要

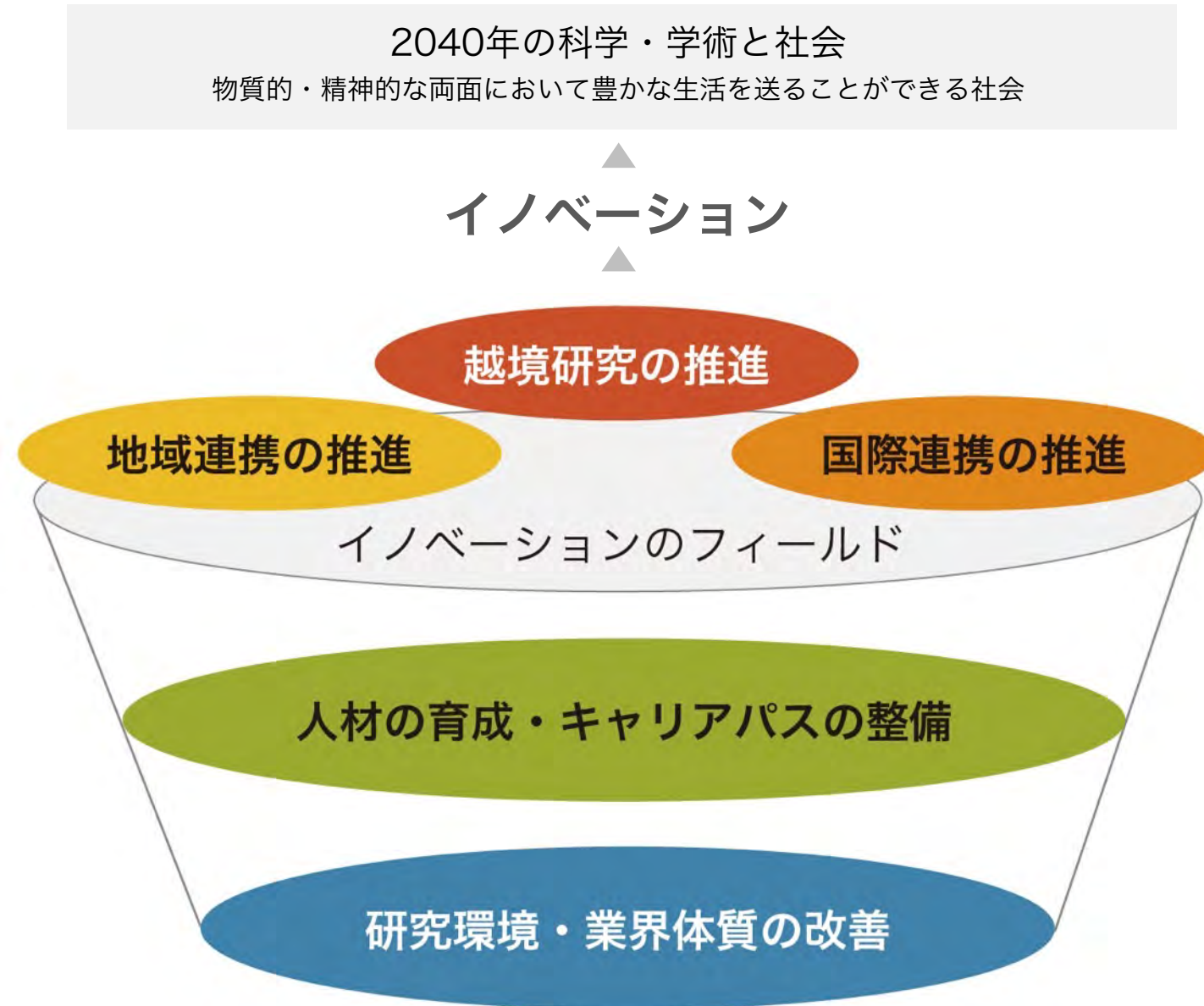
主催：日本学術会議若手アカデミー
共催：ナスコンパレー協議会
問い合わせ：公益シンポジウム事務局
(shibasaki@yaphod.co.jp)

公開シンポジウム
那須地域から考える20年後の日本社会
共領域におけるイノベーション創出と地方創生

2022年9月5日(月) 14:17時
那須ハイランドパークイVENTホール
(那須本那須那須町高久3-3-75)

イノベーション・アクセラレーター

我が国のイノベーション創出を科学・学術の立場から支えるために



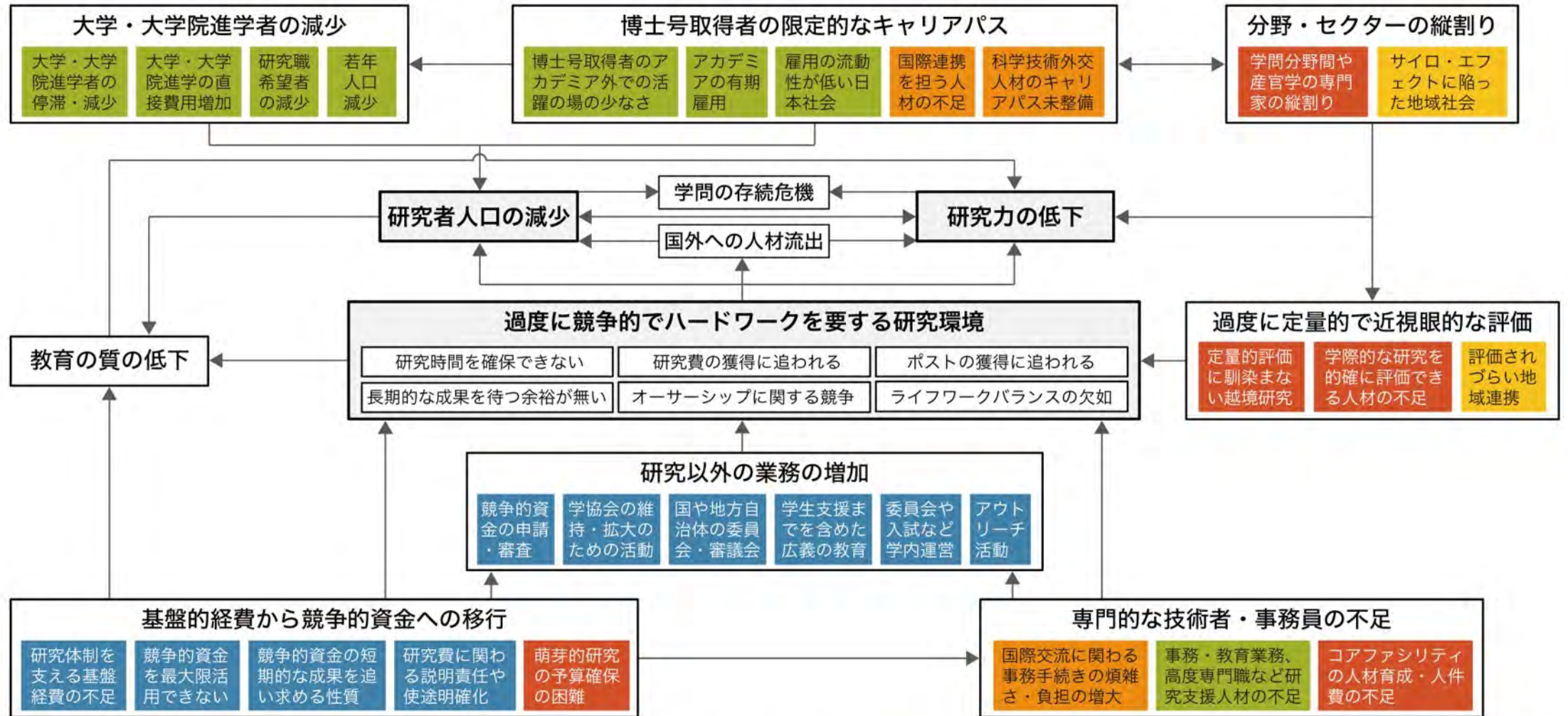
2040年の科学・学術と社会

いまこそ研究環境・業界体質を改善し、
人材育成・キャリアパス整備を推進し
なければ、越境研究・国際連携・地域
連携は推進されず、今後20年間にわ
たる我が国からのイノベーションの創
出も期待できない

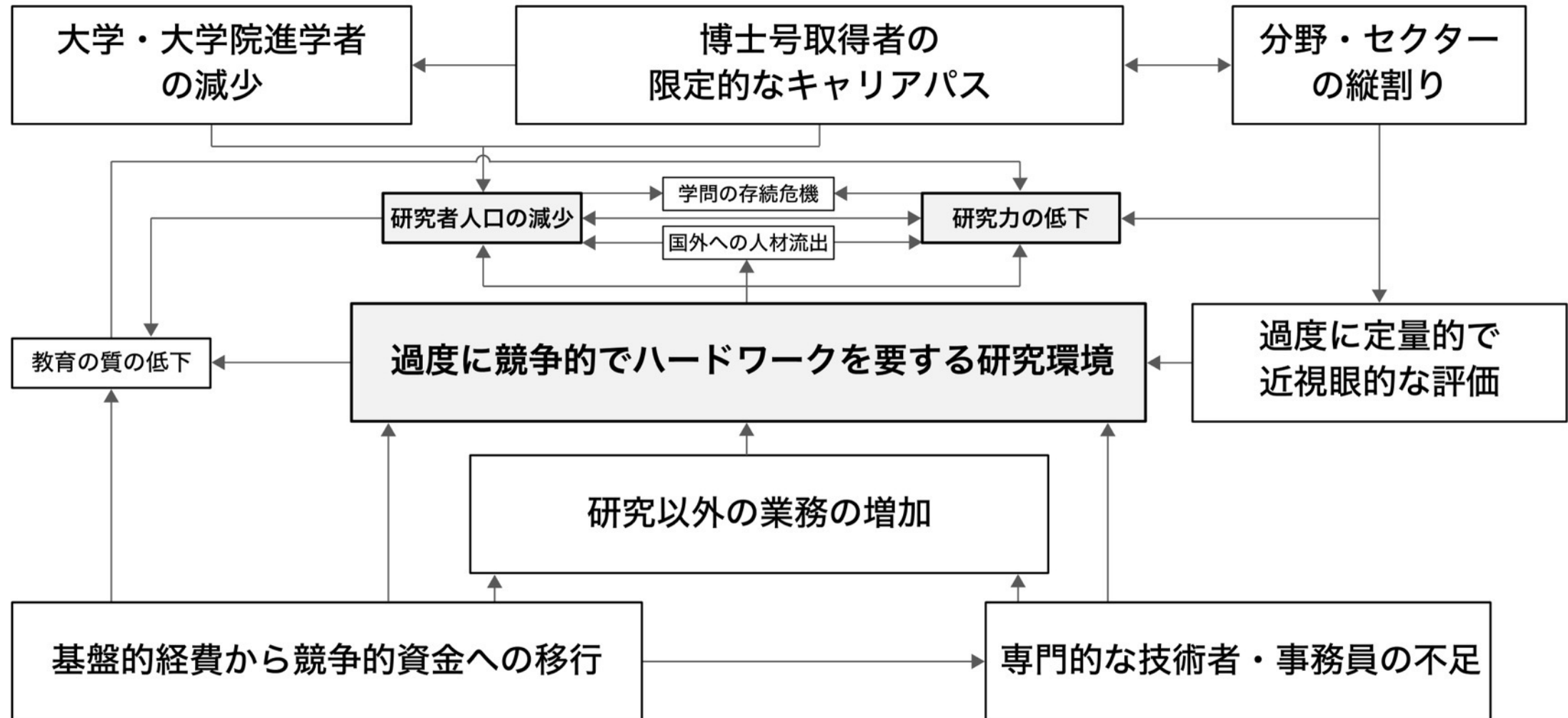
研究環境・業界体質の改善

我が国のイノベーション創出を阻む要因

【背景】 人口減社会：若年人口減少→潜在的な大学・大学院進学者の減少、労働生産人口の減少→人材獲得競争の激化
地域課題解決の担い手の不足と地域の社会・経済を支える環境の劣化・損失という負のスパイラル
科学・学術、産業、外交などにおける国際的地位の低下

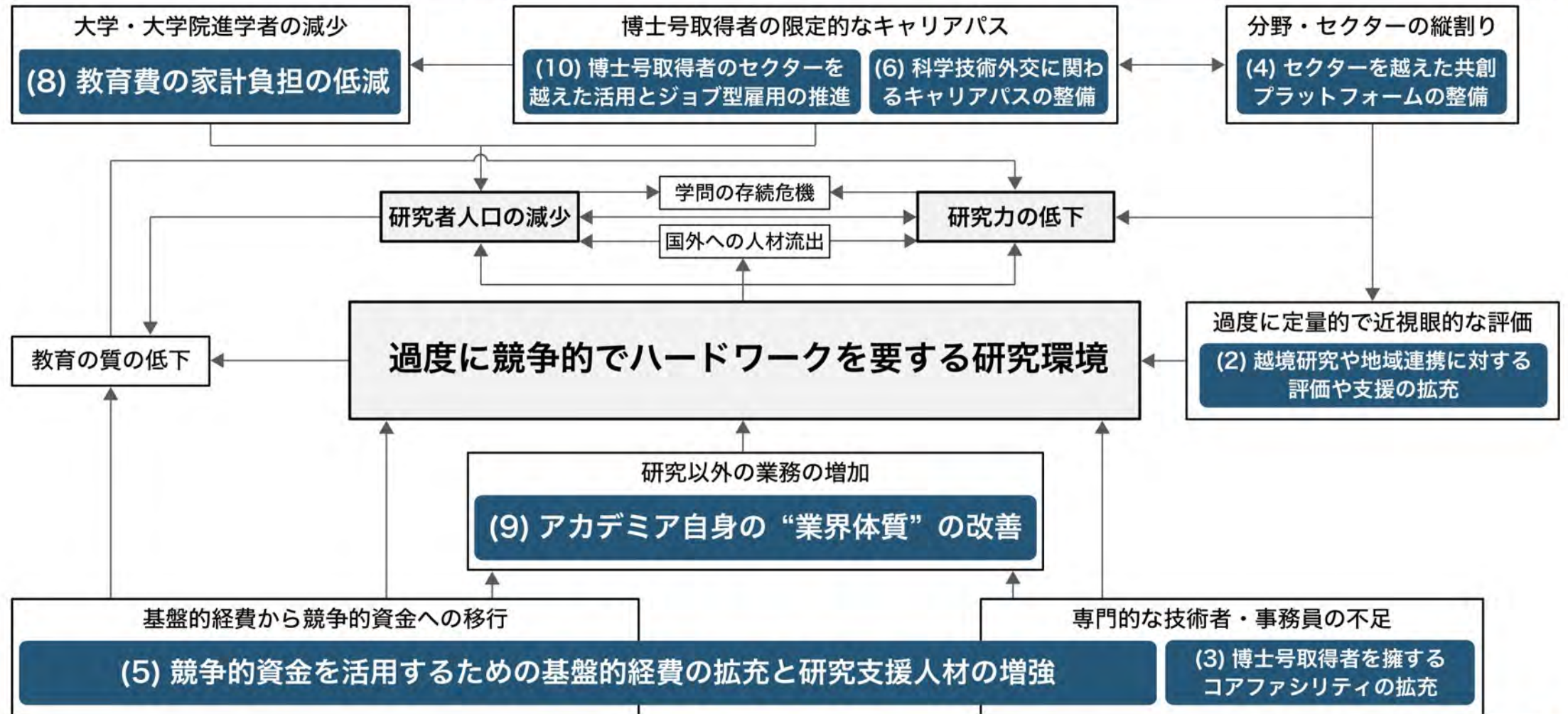


我が国のイノベーション創出を阻む要因



イノベーション創出のためにいま取り組むべき10の課題

(1) 基盤的・伝統的分野における知識や技術の蓄積



イノベーション創出のためにいま取り組むべき10の課題

(1) 基盤的・伝統的分野における知識や技術の蓄積

基盤的・伝統的分野における知識と技術の蓄積こそが我が国の学術研究の根底をなす豊かな土壌であり、その維持と発展が決定的に重要である。

(2) 越境研究や地域連携に対する評価や支援の拡充

学際的な越境研究や、地域課題を解決するための学術活動を長期的な時間スケールで的確に評価するシステムの確立や、ポストや予算のさらなる措置が急務である。

(3) 博士号取得者を擁するコアファシリティの拡充

業務過多の中でも多様な人材が活躍し、重要な研究課題に集中するために、諸外国と同様に高度な技術者を擁するコアファシリティの拡充が急務である。

(4) セクターを越えた共創プラットフォームの整備

アカデミアが産業界・行政・地域社会と連携し、力を合わせて重要な領域横断的課題を解決するとともに、連携できる人材を育成する共創の場の整備が急務である。

(5) 競争的資金を活用するための基盤的経費の拡充と研究支援人材の増強

基盤的な経費や人材の不足により競争的資金を十分に活用できていない本末転倒な状況を改善するために、基盤的経費の拡充と研究支援人材の増強が急務である。

イノベーション創出のためにいま取り組むべき10の課題

(6) 科学技術外交に関わるキャリアパスの整備

科学・学術分野における我が国の国際連携力を根本から強化する人材として、科学技術外交を担うことが出来る人材の育成とそのキャリアパスの整備が急務である。

(7) 過度な経営的視点や失敗を許さない前例踏襲主義からの脱却

0から1を創り出すイノベーションを支えるため、経営的な視点に依存しすぎた研究費などのリソース配分を改め、失敗を許容する予算配分や運営を行うことが急務である。

(8) 教育費の家計負担の低減

大学院生の減少を食い止め、イノベーション人材を供給していくための最も効果的なアプローチとして、教育費の家計負担をさらに減らすことが急務である。

(9) アカデミア自身の“業界体質”の改善

ハードワークを美德とする業界体質を改善し、活動の本質を明確にした上で、自己目的化した活動をアカデミア自らが改善していくことが急務である。

(10) 博士号取得者のセクターを越えた活用とジョブ型雇用の推進

多様なセクターでの高度専門人材の活用を推進し、雇用の流動性を高めること、そのためのジョブ型雇用の推進が急務である。

資料5 10の課題に対する改善策

改善策	主なステークホルダー				特に関連する5領域	該当ページ
	学	産	官	民		
(1) 基盤的・伝統的分野における知識や技術の蓄積	●				越境・地域・国際	2
(2) 越境研究や地域連携に対する評価や支援の拡充						
・多様な知識生産のあり方を踏まえた研究評価方法の確立	●				越境・地域・人材	5,6,7,8,10,12,18
・学際的な研究者やプロジェクトを的確に評価する仕組みや人材	●	●	●		越境・人材	5
・学際や異分野融合を目的とした組織や取り組みへの十分なポストや予算の分配	●				越境・人材	5
・萌芽的な研究を支える小規模な予算の拡充（学内資金など）	●		●		越境・環境	6
(3) 博士号取得者を擁するコアファシリティの拡充	●		●		越境・環境	6
(4) セクターを越えた共創プラットフォームの整備						
・アカデミアの研究者と産官民のマッチング・交流機会の創出	●	●	●	●	越境・環境	6
・地域に根差した問題解決に科学的に取り組む専門人材を育成し、地域の行政機関に活用できる体制	●		●		地域・人材	8
・主体的に進路を決定する能力・態度を育成するキャリア教育（インターンシップを希望する高校生やリカレント教育を希望する社会人と、それを受け入れる研究室とをマッチングさせる仕組みの確立など）	●				地域・人材	8
・地域の人的資源等を活用し、学校教育と社会との連携を行うスキームの効率化	●			●	地域・人材	8
・超領域的社会課題を解決する人材の支援（若手研究者の長期有給インターンシップ、企業と大学による優秀な若手研究者の発掘など）	●	●	●		地域・人材	8
・産官学民が地域課題の解決に連携して取り組めるプラットフォームの構築	●	●	●	●	地域・環境	8
・地域連携などにおける行政側からの人的サポートの拡充			●		地域・環境	9
(5) 競争的資金を活用するための基盤的経費の拡充と研究支援人材の増強						
・事務・教育業務や技術職員等専門職人材を含む研究支援人材の処遇改善と、安定して雇用できる基盤的経費の措置	●		●		環境	19,20
・複雑化する研究資金制度の見直し			●		人材・環境	19
・IT 活用に必要な設備にかかる予算の確保、IT 活用を阻害する法や規制の緩和	●		●		環境	19,20
・国際的なネットワークを持つ研究者人材の育成（国際学会への参加、研究者同士のネットワーク機会、人材交流など）	●		●		国際・人材	9,10
・留学生や外国人研究者を受け入れやすい環境の整備（経済的待遇や受け入れ環境の問題の解消、事務手続きの支援体制整備など）	●		●		国際・環境	11

・海外留学や在外研究を行いやすい仕組みの整備（留学支援の仕組みの強化、事務手続きの支援体制整備など）	●		●		国際・環境	11
・海外の研究機関等で活躍した人材が日本で研究活動を展開できるように研究環境・人材ともに国際的に良質なものを保つ	●		●		国際・環境	11
・大学院生が十分な質の研究教育を受けられるよう教育機関が十分な研究教育用予算を研究室に分配	●		●		人材	14
・心理・精神・法律・教育など学内支援において要請される専門的な知識を有する大学内外の専門的人材をチームとみなして広義の教育を実施する新しい大学運営のありかたの樹立	●	●	●		環境	19
(6) 科学技術外交に関わるキャリアパスの整備						
・科学技術外交を担うことが可能なアカデミア人材の育成およびキャリアパスの整備	●		●		国際・人材	10
・国際連携の意義や内容を研究者、関係者、国民などへ伝える	●			●	国際・人材	10
(7) 過度な経営的視点や失敗を許さない前例踏襲主義からの脱却	●		●		環境	18,19
(8) 教育費の家計負担の低減						
・大学・大学院進学に関わる直接費用の負担を減ずる政策ミックス（給与奨学金、低利率の貸与奨学金の拡大、学費免除枠の拡大、民間教育ローンの利子補填、地方の大学進学機会の確保策など）	●	●	●		人材	13
・学生宿舍の整備など	●				人材	13
・理数系の学びに対するジェンダーギャップの解消	●			●	人材	13
(9) アカデミア自身の“業界体質”の改善						
・大学や研究機関における研究エフォート確保の実質化	●				環境	17
・教員間の役割分担の推進（教育面で活躍する教員の配置など）	●				環境	17
・チャットツールやオンライン会議システムの活用などによる学内運営の効率化	●				環境	17
・入試多様化の見直し	●				環境	17
・学協会活動の見直しと整理	●				環境	18
・競争的資金や研究者評価の過剰な審査コストの軽減（“スクリーニング&ランダム”方式の導入など）	●		●		越境・地域、環境	18
・国や地方自治体の委員会・審議会の負担軽減（学協会と行政との協議による効率的・効果的な委員会・審議会の再構築など）	●		●		環境	19
(10) 博士号取得者のセクターを越えた活用とジョブ型雇用の推進						
・教育に携わる研究者・大学教員の確保における大学間の連携	●				人材	14
・アカデミア以外のセクターに散在する博士号取得者が大学院教育に携わる研究教育環境の整備	●	●	●			14
・研究職の優位性の引き上げ（博士号取得者の専門性に加え、高度人材としての問題解決能力や論理的思考、知的好奇心などの汎用的能力の適切な評価など）	●				人材	14
・博士号取得者が専門性を活用して多様なセクターにおいて活躍できる状況の整備（大学・研究機関側による博士号取得者の能力の客観化、それ以外のセクターによる専門性を活用できる業務内容の構築、業務遂行に求める能力の詳細な定義など）	●	●	●		人材	15
・ジョブ型雇用の推進	●	●	●		人材、環境	15,20

若手研究者をとりまく評価に関する意識調査

本調査は、若手研究者にとっての評価をめぐる現状認識と理想像の乖離について分析することで、知識生産をめぐるより良いエコシステムの形成に寄与することを目的とする。

調査期間	2022年6月7日～7月5日
調査対象	45歳未満の若手研究者（大学院生や若手の専門職を含む）
調査方法	Webアンケート
周知方法	日本学術会議と文部科学省からの依頼により、学協会や大学を通じてURLを配布
有効回答数	7849名（全回答数8629名から調査対象外の者を除いた）
資金助成	公益財団法人日本学術協力財団原田弘二基金

※回答者は若手研究者当事者であり、Webアンケートである性格上、キャリアパスなどに関して相対的に関心の高い層である可能性が高いことに留意

若手研究者をとりまく評価に関する意識調査

若手研究者をとりまく評価に関する意識調査

世界的な競争、評価をめぐる問題、キャリアパスに関する課題など、若手研究者（ここでは、大学院生や若手の専門職の方も含む幅広い意味で使用します）をめぐる研究・知識生産の環境は多くの課題を抱えています。

この調査では、日本学術会議若手アカデミーとして、若手研究者にとつての評価をめぐる現状認識と理想像の乖離について分析することで、知識生産をめぐるより良いエコシステムの形成に寄与することを目的としています。

得られた結果は、学術的な分析を行った上で、報告書やオープンアクセス論文などの形で広く公開・議論します。そして報告やデータに基づいた提案を、政策担当者をはじめ広く社会に共有していくことで今後の研究エコシステムのあり方とその他の科学技術・学術政策を考察するために積極的に活用していきます。

ご回答いただいたデータについて、報告書では、「〇〇」という回答が△△パーセント」というように統計数値にまとめます。また多様な方の検討や学術的利用の促進のためにデータを可能な限り公開します。その際、例えば地域に関わる情報は地域単位（関東、東北など）の形で提示するなどして個人が特定されない形にいたします。そのため、回答者の方のお名前や個人的な情報が外部へ出ることとはございません。また、データや結果を分析・研究・提案等、学術とそれに関連する活動以外の目的で使用することは決してありません。

以上の内容についてご確認の上、ご協力をいただけますようでしたら、ご回答をお願い申し上げます。アンケートへのご回答の送信をもって、ご協力の同意をいただけたものと判断させていただきます。また調査にご協力頂いた方でご希望される場合には、報告書の電子ファイルをお送りさせていただきます。

より良い研究・学術活動を可能にする環境構築に関わる知見獲得のため、可能な範囲で構いませんので、是非回答のご協力をお願いいたします。

本調査の対象：45歳未満の若手研究者の方々

回答に要する時間は10分程度となります。

※本調査では、「研究者」という言葉を、大学院生や若手の専門職の方も含む幅広い意味で使用します。

※なお、本調査は複数のネットワークの協力を得てメール配信を実施しております。お手元に繰り返し届く場合が考えられますが、お一人様一回の回答をお願いいたします。

※本調査は、公益財団法人日本学術協力財団厚田弘二基金の協力の基に実施されています。

本件調査連絡先：25yaj-survey@googlejgroups.com

本調査では、45歳未満の方を対象としています。

また本調査では、「研究者」を、知識生産活動に関わる大学院生や若手の専門職の方など幅広い職種を含む意味で使用します。

年齢（階層）について、お答えください。

- ☐ 1. ～24歳
☐ 2. 25～29歳
☐ 3. 30～34歳
☐ 4. 35～39歳
☐ 5. 40～44歳
☐ 6. 45歳以上

日常における時間配分

Q1 日常生活における時間の配分割合について、現在の平均的な日常と、理想のケースについてそれぞれお答えください。睡眠時間は除いた活動時間全体で合計がそれぞれ100%になるように回答をお願いします。

（半角数字でご記入ください）

	1.現在の時間割合	2.理想の時間割合
1.仕事に使う時間（研究・知識生産に関わる時間）	%	%
2.仕事に使う時間（上記以外）	%	%
3.プライベートの時間（睡眠時間は除く）	%	%
合計		

現在受けていると感じている評価のイメージと理想について

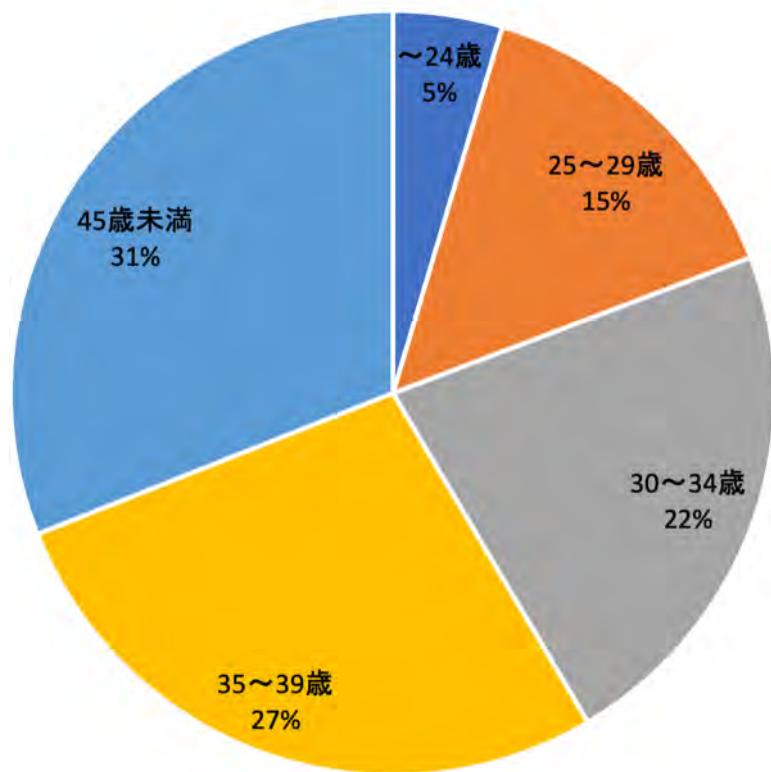
Q2.1 以下の項目に対して、就職・昇進などのキャリアパス構築において、あなたが最近受けた（あるいは受ける予定の）評価で感じる項目の重要度について、その予想をお答えください。※直感的なもので構いませんのでお答えください。

自分の研究・知識生産に関わる活動	1 （評価項目として重要だと感じている）	2	3	4	5	6	7	8	9	10 （評価項目として重要だと感じない）
1.読書、実験、論文執筆などの活動	7	6	5	4	3	2	1	0		
2.出席や出席試験など	7	6	5	4	3	2	1	0		
3.産学連携に関わる活動	7	6	5	4	3	2	1	0		
4.研究予算獲得や事業、プロジェクトマネジメントなど	7	6	5	4	3	2	1	0		
5.研究に関わるアウトリーチ活動	7	6	5	4	3	2	1	0		
6.共同研究契約、新発案、研究などのためのネットワーキング	7	6	5	4	3	2	1	0		
教育に関わる活動	1 （評価項目として重要だと感じている）	2	3	4	5	6	7	8	9	10 （評価項目として重要だと感じない）
7.講義・実習、学生指導など	7	6	5	4	3	2	1	0		
8.学生の学位論文/学術論文に関わる指導	7	6	5	4	3	2	1	0		
9.公開・市民講座、研習生、実人経験など	7	6	5	4	3	2	1	0		
10.学修（入試面接、オープンキャンパス、教職、留学、その他）	7	6	5	4	3	2	1	0		
社会的活動	1 （評価項目として重要だと感じている）	2	3	4	5	6	7	8	9	10 （評価項目として重要だと感じない）
11.学芸活動など（学芸発表、賞状、学会発表、学会等イベントの開催・参加）	7	6	5	4	3	2	1	0		
12.社会連携に関わる専門業務（審議会等委員、地域連携活動、指導や指導、コンサルティング活動など）	7	6	5	4	3	2	1	0		
13.それ以外 ※関係なく回答した場合、「なし」と回答しお読みください。	7	6	5	4	3	2	1	0		

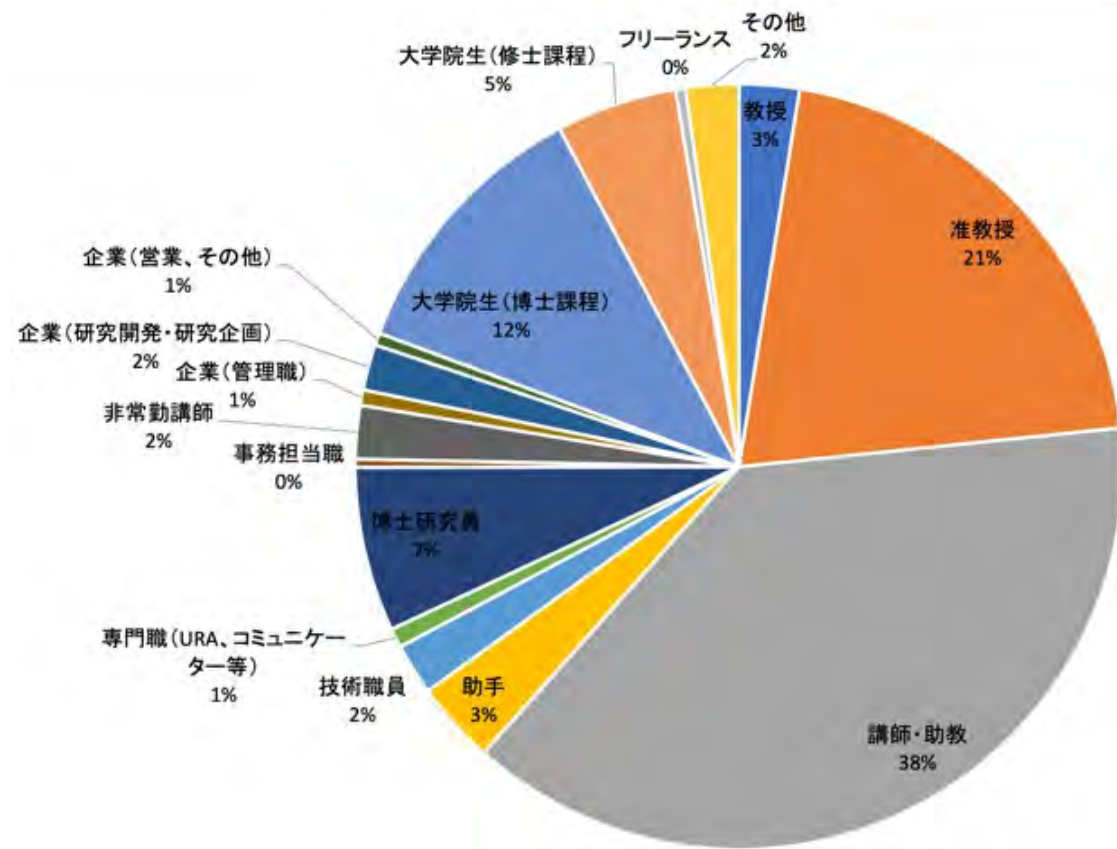


調査票

回答者の基本属性

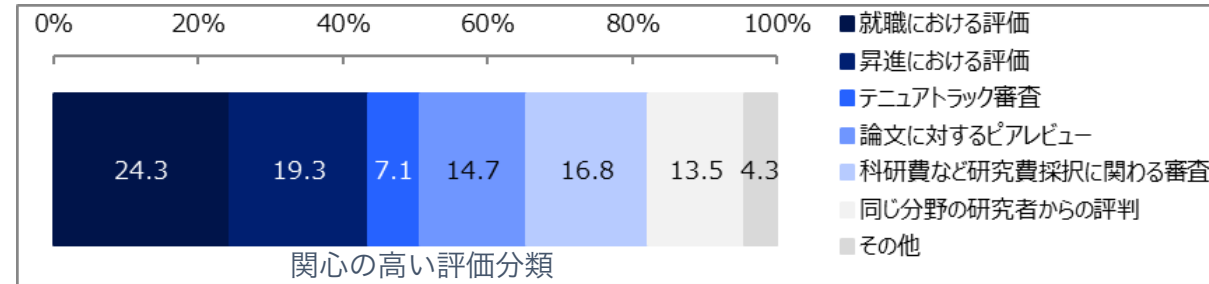
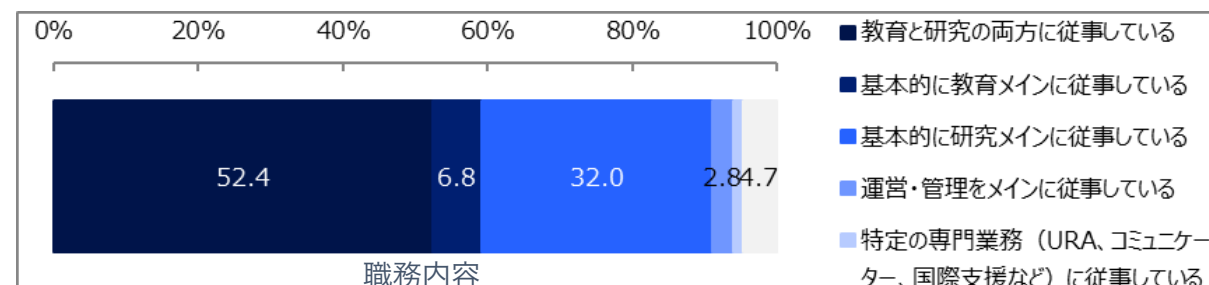
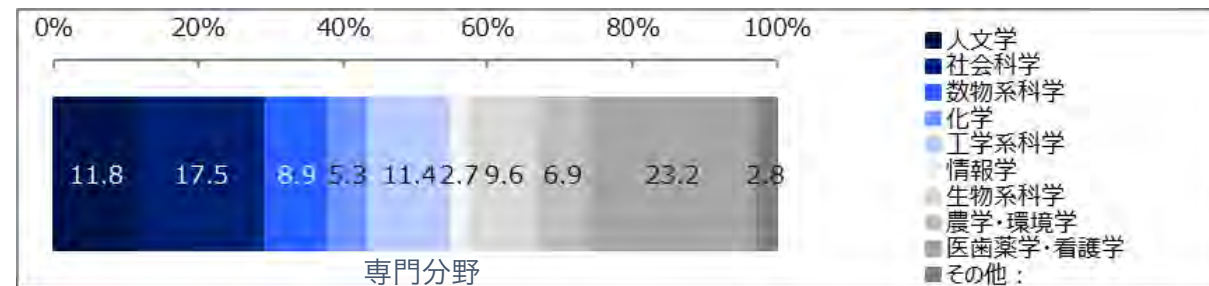
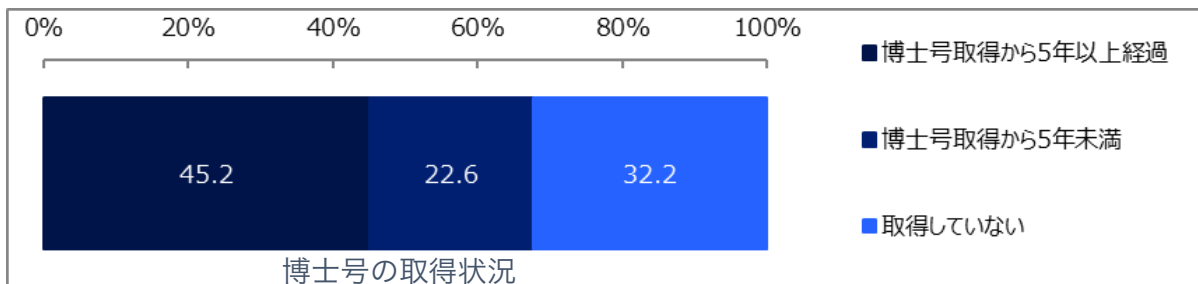
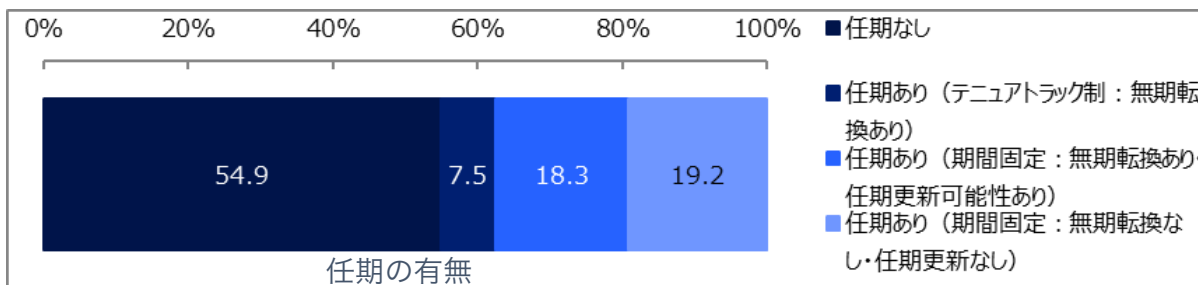
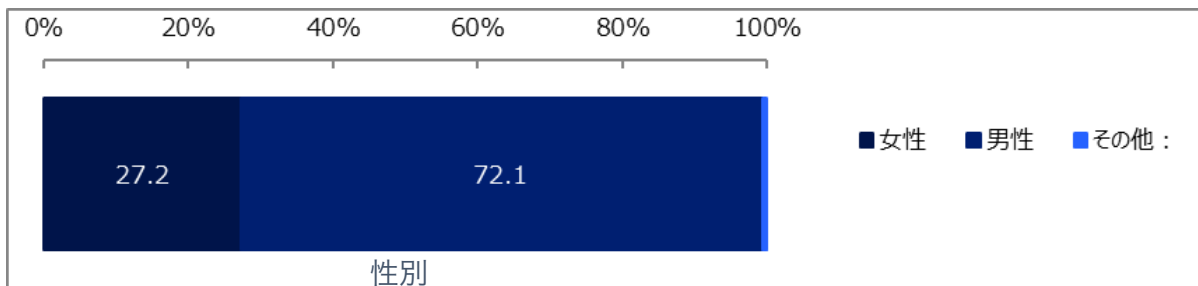


年齢階層



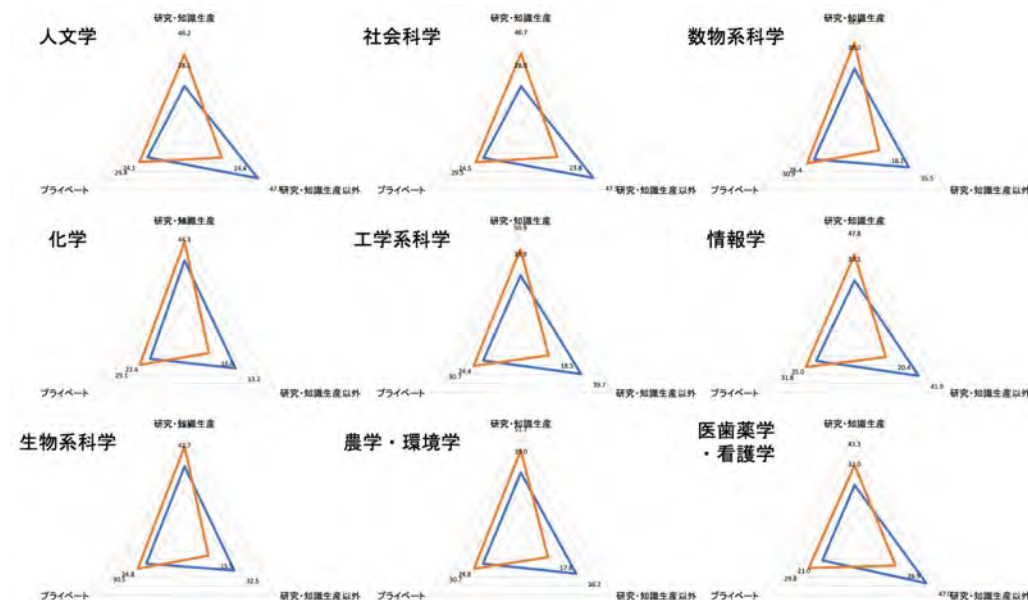
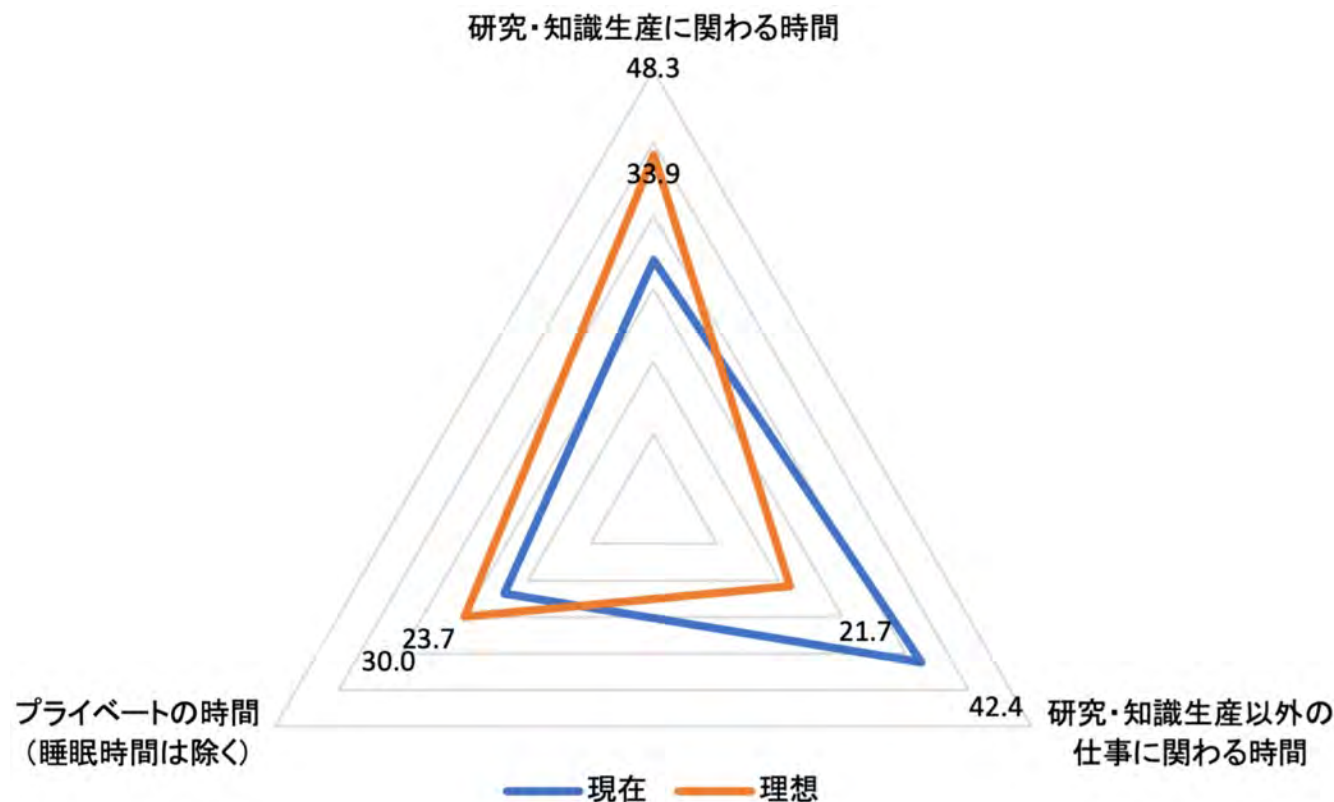
ポジション

回答者の基本属性



- ・ 所属：国内の大学・研究機関が97%
- ・ 子どもの有無：「子どもがいる」は41%
- ・ 介護の有無：「介護をしている」は3%

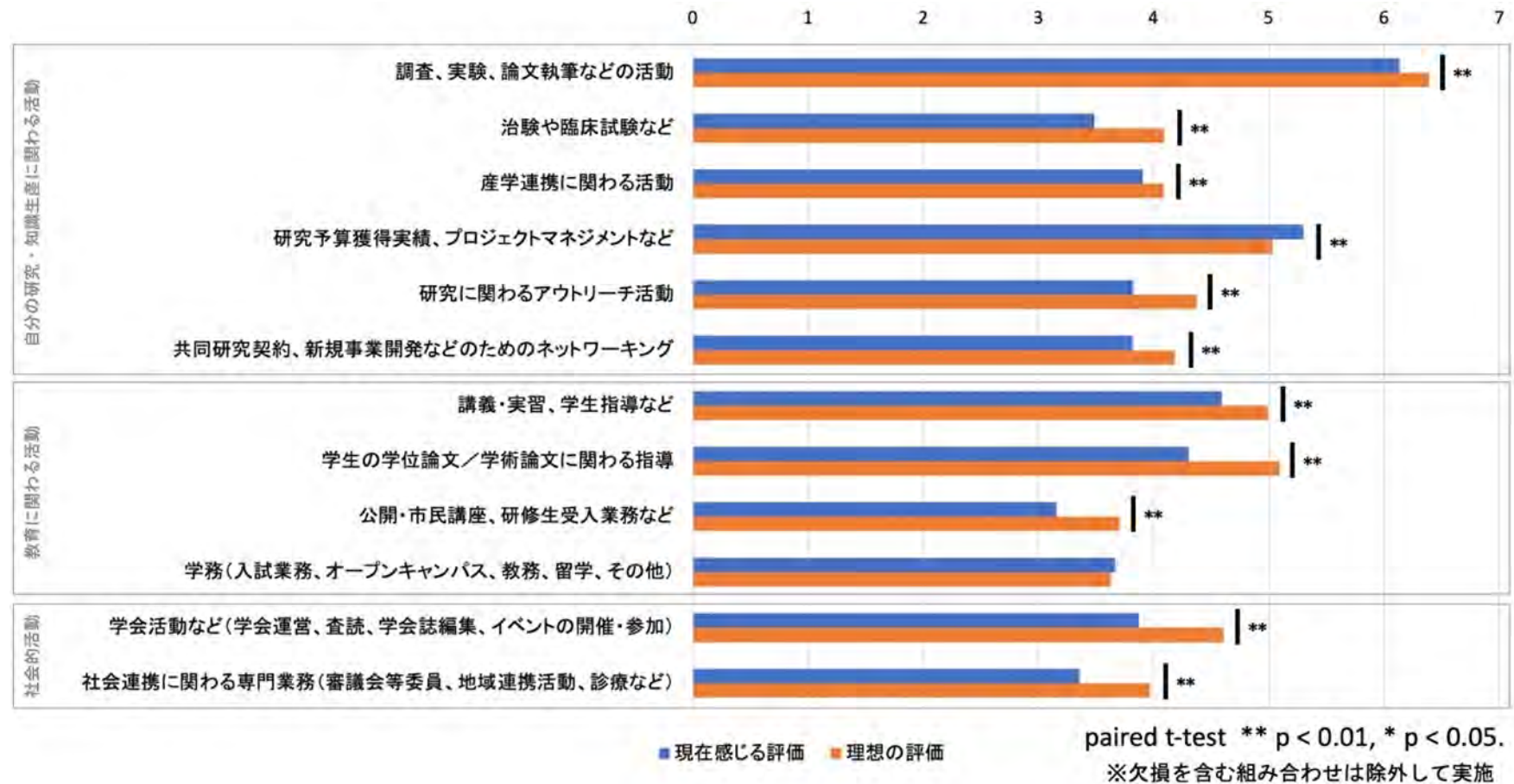
現在と理想の時間配分割合



「研究・知識生産以外の仕事に関わる時間」を現在の半分にして、その分を「研究・知識生産に関わる時間」や「プライベートの時間」に振り分けたいと感じている

- ・ 教育・学務・そのほかの「仕事（知識生産以外）」に2割程度の時間投下することは受容されやすいかもしれない。そのための仕掛けとしての専門職・事務職支援の強化が期待される。
- ・ 分野によって「仕事に使う時間（研究・知識生産以外）」の内実は異なる、各分野の背景に注意した議論が必要となる。

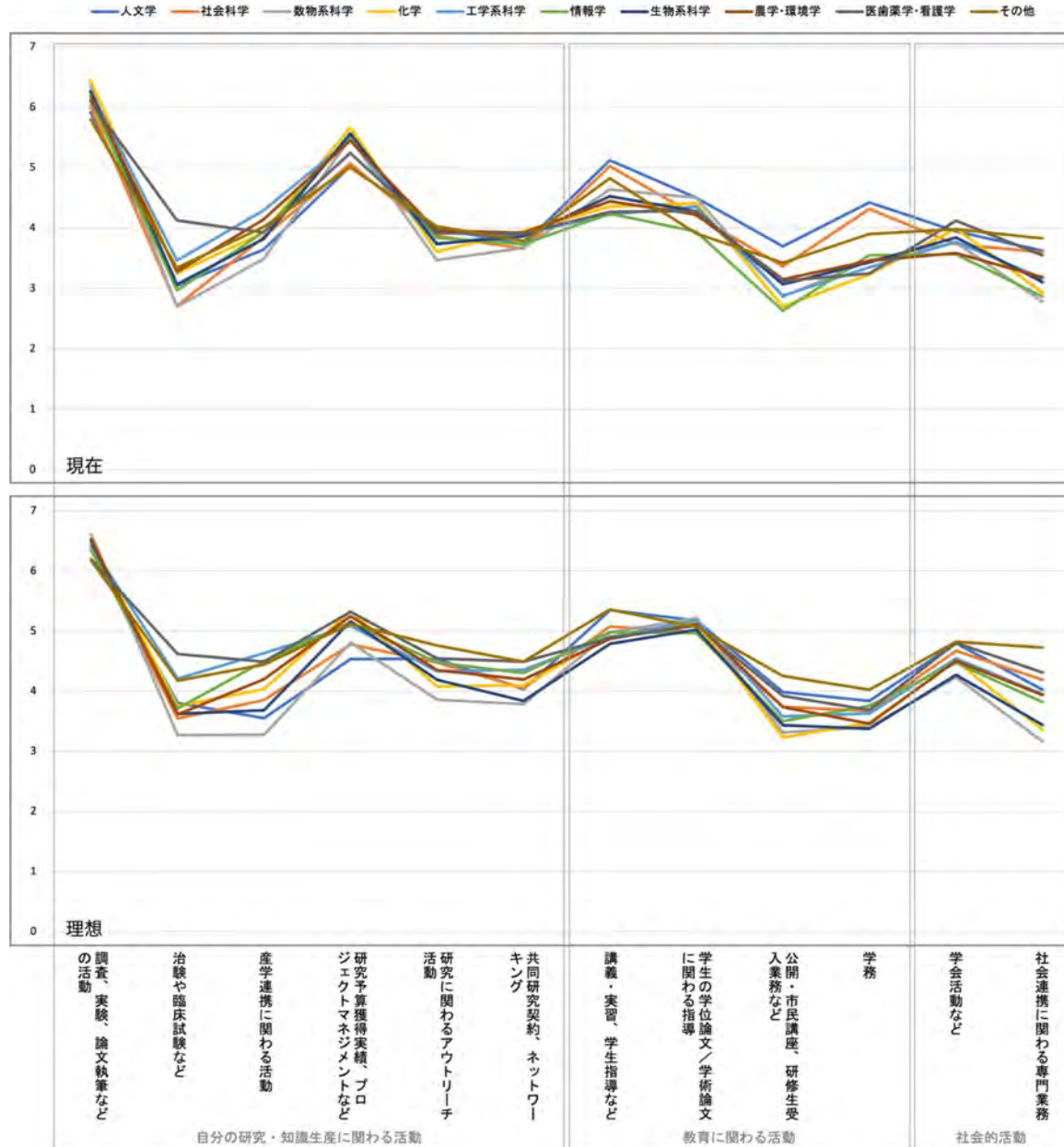
現在受けていると感じている評価と理想の評価



研究・知識生産に関わるさまざまな活動について、概して、十分に評価されていないのではないかという懸念や不満、もっと評価してほしいという希望が垣間見える

「調査、実験、論文執筆などの活動」の評価が重要視されることについては納得が共有されているといえる

現在受けていると感じている評価と理想の評価（分野別）



概してどの分野も同じ傾向

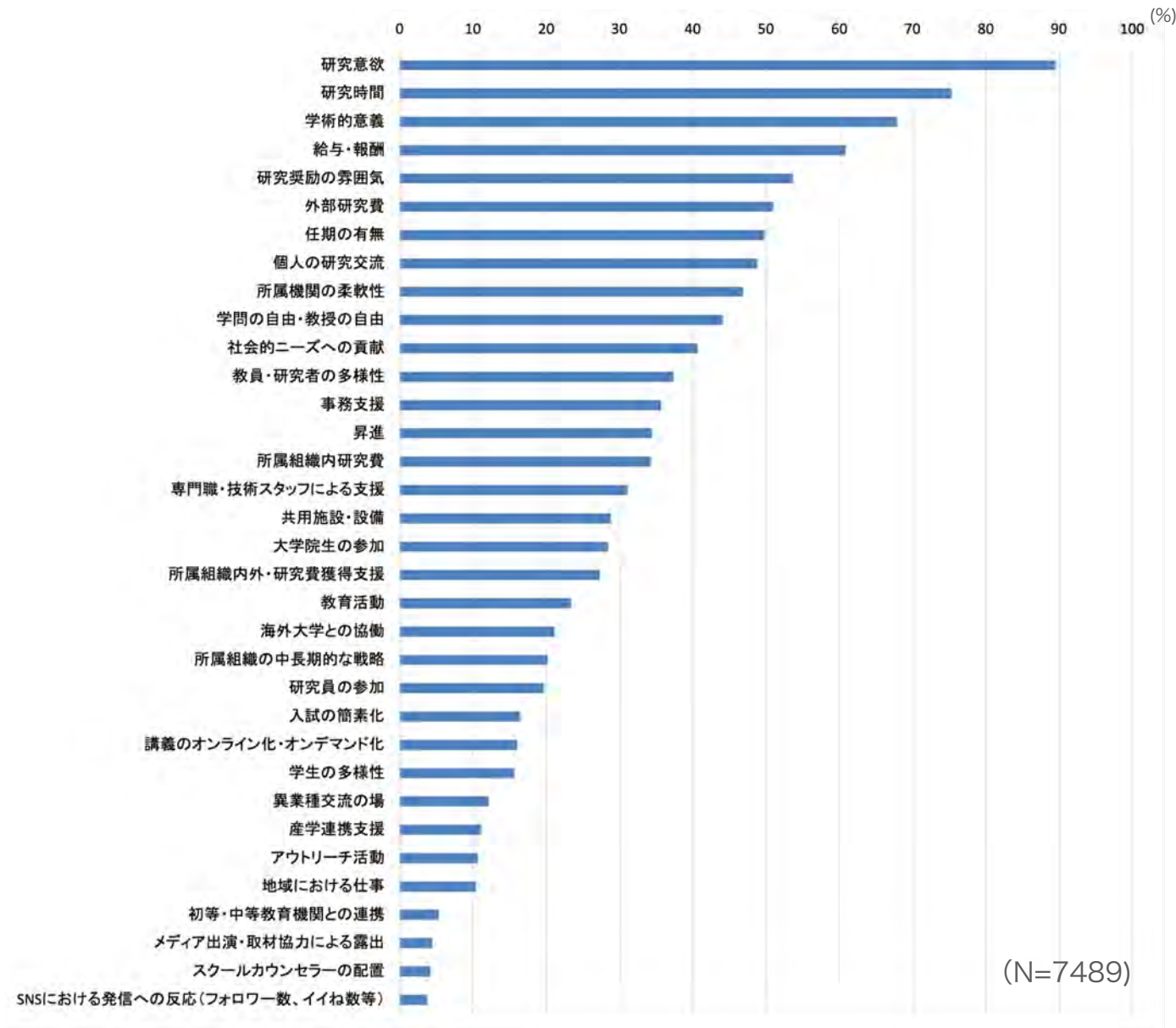
どの分野でも「調査、実験、論文執筆などの活動」が現在、理想のいずれにおいても最も重要度が高く認識されている

「研究予算獲得実績、プロジェクトマネジメントなど」を除くと基本的には現在<理想

「産学連携に関わる活動」では数物系科学、生物系科学、工学系科学で、「学務」では人文学、社会科学で、現在>理想

→分野によって若手研究者に過度なプレッシャーがかかっていることが示唆

知識生産活動に関連して重要だと思う環境要因



「研究意欲」や「学術的な意義」、「研究奨励の雰囲気」などモチベーションに関わる項目や「研究時間」が研究・知識生産活動に影響を与える重要な要因として認識されている

「給与・報酬」や「任期の有無」など職業としての安定性に関わる項目が続く
いずれの年代や職階でも同様の傾向

知識生産活動に関連して重要だと思う環境要因

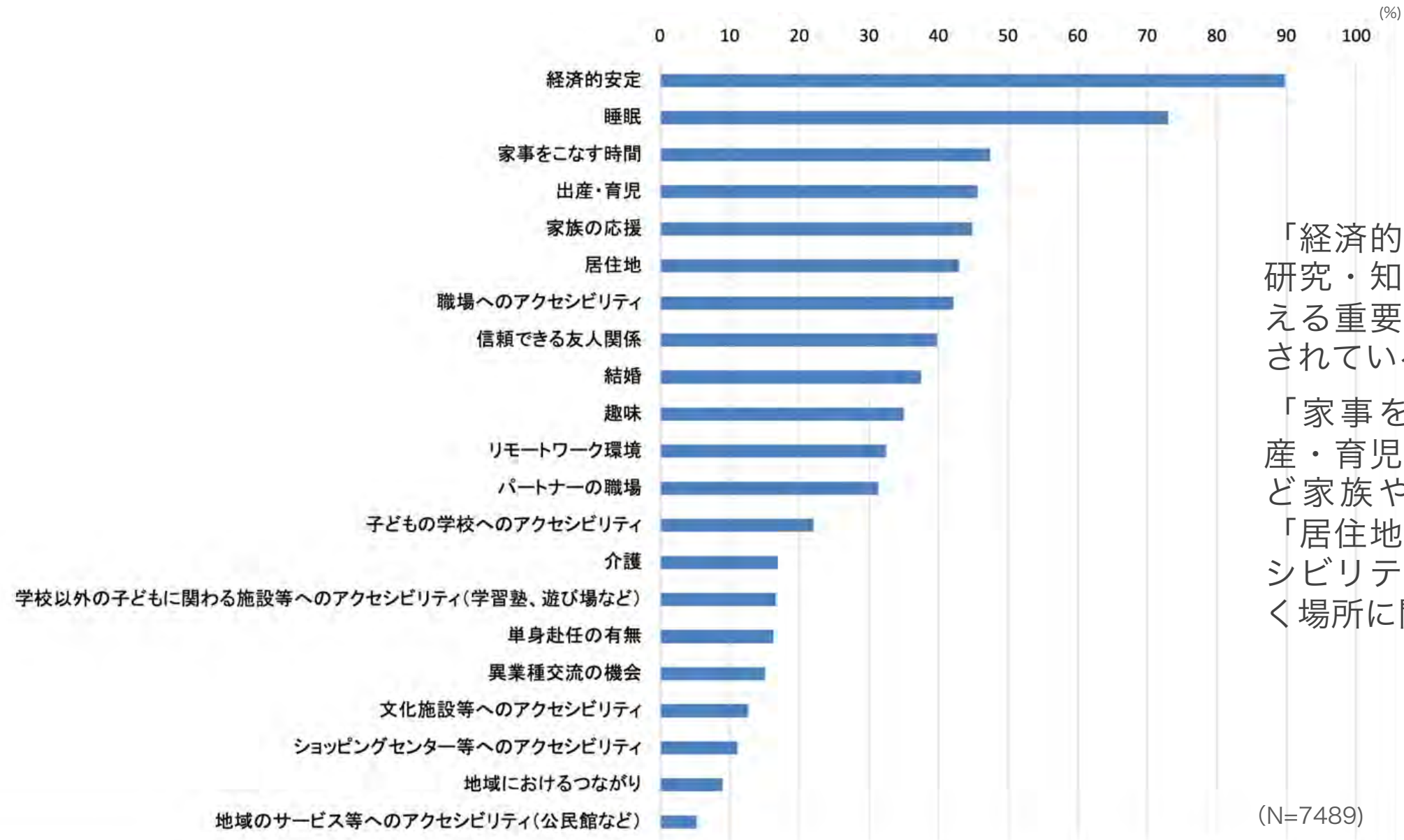


知識生産活動に関連して重要だと思う環境要因の数量化Ⅲ類分析による回答パターン分類

博士号取得前後と取得後の経過時間に応じて、研究・知識生産に関して注目する要因が「研究の意義」から「雇用環境」へと変化する

→キャリアを重ねるにしたがって、雇用環境などを考えざるを得ない状況が窺える

知識生産活動に関連して重要だと思う生活要因

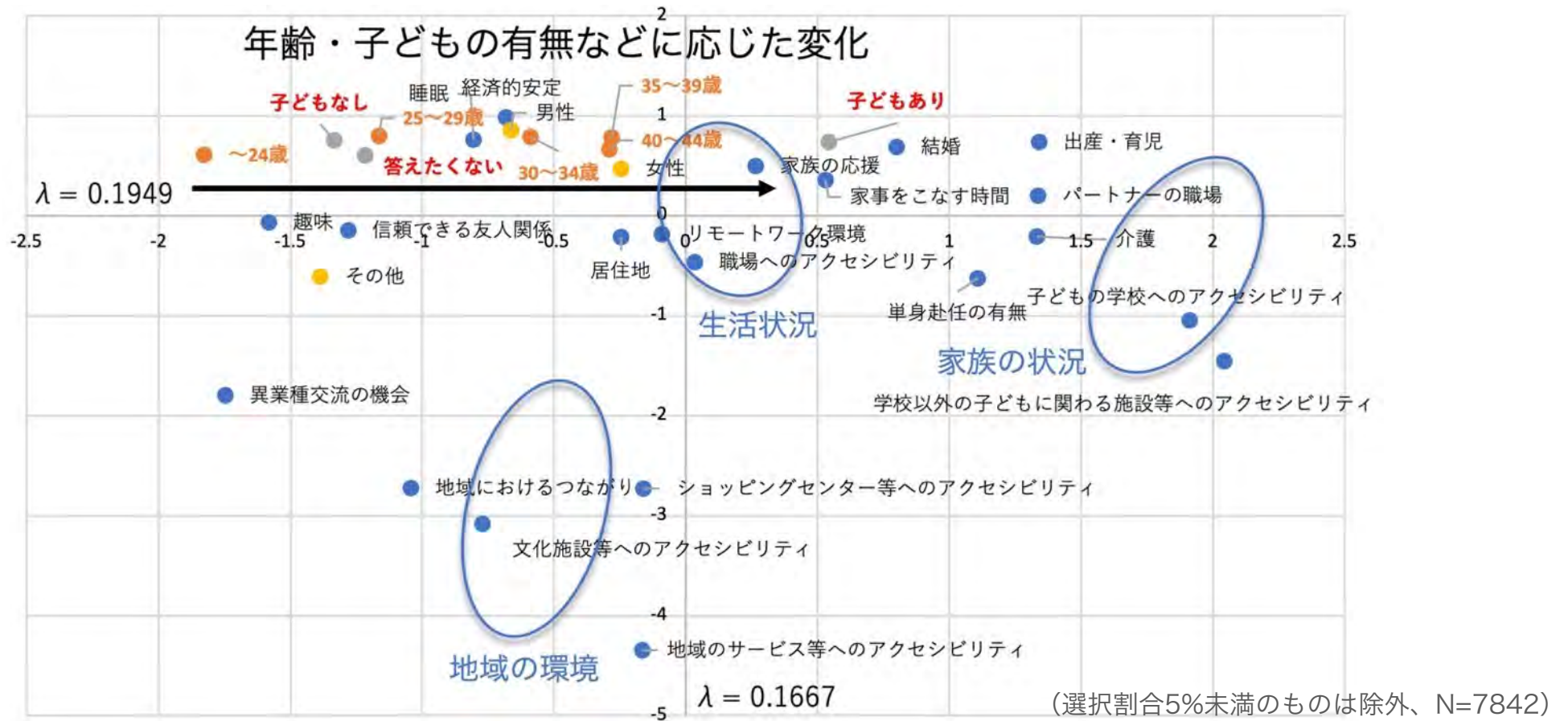


「経済的安定」と「睡眠」が、研究・知識生産活動に影響を与える重要な生活要因として認識されている

「家事をこなす時間」、「出産・育児」、「家族の応援」など家族や生活に関わる項目、「居住地」や「職場へのアクセシビリティ」など住む場所・働く場所に関する項目が続く

(N=7489)

知識生産活動に関連して重要だと思う生活要因



知識生産活動に関連して重要だと思う生活要因の数量化Ⅲ類分析による回答パターン分類

年齢や家族の変化によって、子どもや家庭への関心が高くなる。

→知識生産活動と切り離して考えることができなくなる様子が窺える

⇒ライフプランやキャリアパスに応じた当たり前の支援の重要性

調査結果まとめ

- 「研究・知識生産以外の仕事に関わる時間」を現在の半分にして、その分を「研究・知識生産に関わる時間」や「プライベートの時間」に振り分けたいと感じている
 - 教育・学務・そのほかの「仕事（知識生産以外）」に2割程度の時間投下することは受容されやすいかもしれない。そのための仕掛けとしての専門職・事務職支援の強化が期待される。
 - 分野によって「仕事に使う時間（研究・知識生産以外）」の内実は異なる、各分野の背景に注意した議論が必要となる。
- 研究・知識生産に関わるさまざまな活動について、概して、十分に評価されていないのではないかという懸念や不満、もっと評価してほしいという希望が垣間見える
- 「調査、実験、論文執筆などの活動」の評価が重要視されることについては納得が共有されているといえる
- 博士号取得前後と取得後の経過時間に応じて、研究・知識生産に関して注目する要因が「研究の意義」から「雇用環境」へと変化する
 - キャリアを重ねるにしたがって、雇用環境などを考えざるを得ない状況が窺える
- 年齢や家族の変化によって、子どもや家庭への関心が高くなる。
 - 知識生産活動と切り離して考えることができなくなる様子が窺える

⇒ ライフプランやキャリアパスに応じた当たり前の支援の重要性